

研究経過報告

—東京から名古屋へ、昭和から平成へ—

野口裕之

昭和63年4月1日付で名古屋大学教育心理学教室の一員となった。大学院生であった？年前から時々この紀要を見て各先生方の研究経過報告を読み、名大というのはすごい所だと感心していたのであるが、その頃はまさか自分がこの研究経過報告を書くようになるなどとは思ってしなかつた。読むのは気楽であるが、いざ書くとなるとなかなか難しいもので自分がこのところいかに業績を出してしなかつたかが身にしみる。

東京から名古屋へ移って1年半余り。最速の“ひかり323号”で1時間49分。東京圏では2時間を超える通勤時間も決して珍しくなくなっており、ほんの郊外へ移ったつもりであったが、そこは尾張藩以来の伝統の地、なかなかのカルチャーショックではあった。大学の方は随分慣れたが、街や人々の話すイントネーションは未だに十分に慣れたとは言いがたい。この1年半に発表した論文等は極めて少ない。もともと量は多くはないがそれにしても少なかつたが、自らの怠惰・無能をカルチャーショックのせいにしてはお城の鯪様に申し訳げがない。

昭和63年分から順に報告すると、

- ① 項目反応理論における等化係数の最尤推定について（東京学芸大学紀要，39，43-54）

これは前の大学での最後の仕事になるわけで、項目パラメーターの最尤推定値と最尤推定量の漸近的性質を利用して2つの独立に構成された潜在特性尺度を等化するための係数を推定する方法を提案した。実際に様々な条件の下で本方法がどの程度有効であるかについてキメ細かく検討する事が課題として残された。

- ② 教育心理学に於ける測定・評価研究の動向（教育心理学年報，28，115-124）

これは最近1年間の教育心理学に於ける測定・評価研究の動向を、テストの作成及びテストの信頼性・妥当性に関する研究、テストの実施方法に関する研究、テスト理論に関する研究、統計的方法に関する研究、その他の

5つに分けてまとめたものである。

- ③ IRT正規累積モデルに於ける等化係数の推定（名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——）

これは本紀要にまとめたもので、項目の識別力と困難度の両方のパラメーター推定値を同時に利用し、しかも簡単な計算で等化係数の値を推定する方法を提案した。本方法は実は他の問題について検討している時にタマタマ偶然にひらめいたものである。従って今少し検討を進めるべき点が今後出て来るものと思われる。

これらの他には、複数の辞典に複数の項目を執筆したが省略する。

このように見て分かる通り残念ながら論文と呼べるものは1つも無い。アイデアはいくつか抱えているがなかなか実行に移せないでいる。

教育活動の方については、結構力を入れたと胸を張って言える。特に、教育統計関係の授業の中で古典的テスト理論を、大学院ゼミで項目反応理論を取り上げた。これまでは自分の研究分野の事を教育活動の中になかなか生かす事が出来なかつたが、こちらに来て実現する事が出来た。教育活動はそれだけで独立しているのではなく、教える事によって、或いは教える準備をする事によって自分の理解の不完全さが明らかになり、さらには自分なりの体系が頭の中により鮮明に出来上がってくる。この点についてはこの1年半の間で大きな進歩があったと言える。

大学では研究と教育とは車の両輪の様に何れも大切だと云われるが、私の場合は一輪車に乗っていた事になる。そのうちに、こんな無能な奴は出て行けという声が噴出するかもしれないが、その時は鯪様の金の鱗の1枚でも記念に頂いて行こうかと思う。しかし文化財を壊しては申し訳ないで、きっとやさしい名古屋の人々が私のような怠惰な人間でも置いて下さるであろうなどと虫のいい事を考える今日この頃であります。